

30303



教科書文庫

3
810
41-1899
20003 01458

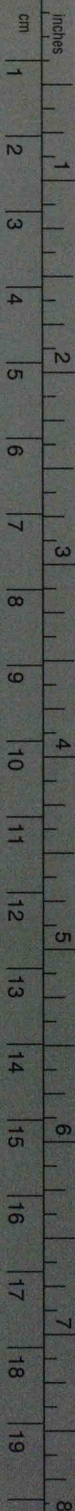
M32
1899

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

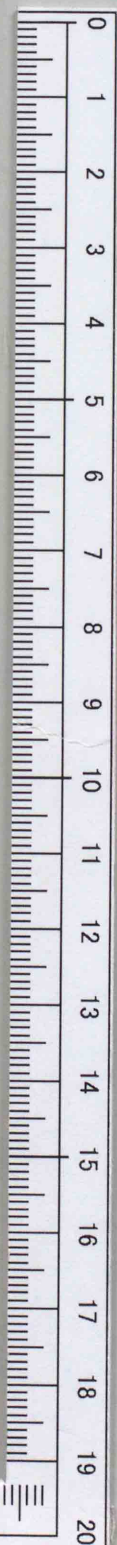
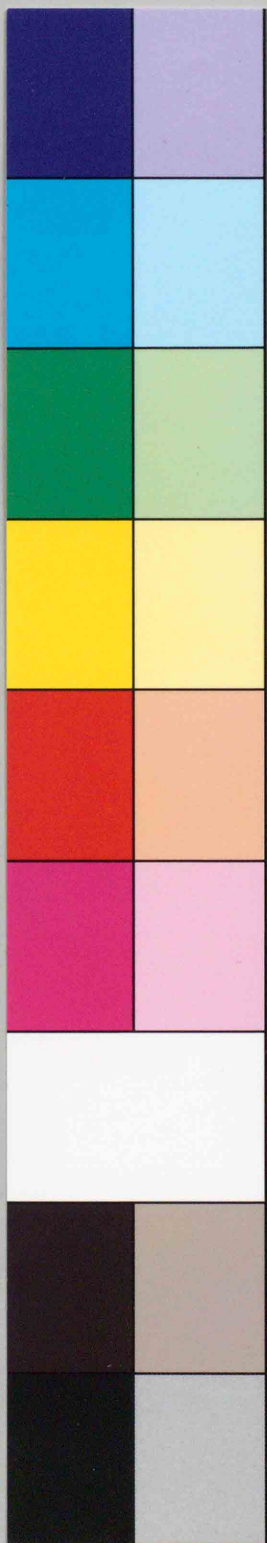
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



中等國文讀本
落合真文編
卷四



中等國文讀本卷四目次

國語國文の變遷
 言語の保護
 學者の本領
 建武中興論
 學者の心得
 わが幼時
 習字
 作文
 文字の死活

井上 落合 内藤 井上 八田 新井 本居 山縣 菅茶山
 毅 澄 直 正 毅 紀 石 長 南 山

室鳩巢に與ふる書

新井白石

書籍の貸借

本居宣長

長幼の序

松平樂翁

駿河大納言

新井白石

兄弟

松平樂翁

陰德

貝原益軒

正直なる父子

松崎堯臣

浪子賊に遭ふ

松崎堯臣

刀 劔その一

新井白石

刀 劔その二

新井白石

本阿彌光悅

今井久右衛門

本卷四目次

細川幽齋

新井白石

柴田勝家

湯淺常山

松平信綱の幼時その一

作者不詳

松平信綱の幼時その二

作者不詳

京都の地震

作者不詳

樺島浪風の記その一

中島廣足

樺島浪風の記その二

中島廣足

霧島山に登る記その一

橘南谿

霧島山に登る記その二

橘南谿

中等國文讀本卷四

國語國文の變遷

井 上

毅

中古漢文の佛法と共に、わが國に入り來りしあり
さまは、恰も、渴者の水を得たるが如く、非常の熱度
を以て歡迎せられ、漢文を以て、公私一般の用文と
なし、律令格式より、歴史、風土記の編纂、裁判の宣告、
官吏の請暇、下は、租税の帳簿、貸借の證文にいたる
まで、すべて、皆、不十分ながらも、漢文を用ゐしめた

り。この時の人の思想には、その語源語法を異にしたる漢文と國語とは、遂に、相合一すべからざることを思はざりしか、或は、又、漢文、漢語を用ゐて、わが固有の國語を撲滅せむとの企なりしか、今より測り知るべからざれども、とにかく、一國の國民としては、一國の命運と共に、固有の國語を愛重すべきことを忘れてたりしが如し。固有の國語を撲滅することは、事情の許さざる所にして、當時、實際の有様は、漢文は、ひとり、博士、學士の間に行はれ、僧侶に行はれ、

國民の一部に行はれしにとどまり、政事上の公文および、政府編纂の歴史は、形式の美觀にとどまりて、一般の國民にとりては、到底、その耳目に熟すべくもあらず、かへりて、文武離隔、朝野蔽塞、大政振はざる原因とはなりしなり。

かくの如く、舉世、迷霧の中にありしも、幸に、豪傑の士ありて、音韻および、假名の用法を發明し、これを通俗に用ゐ、又、和歌に用ゐ、國語と相密着して、自在に使用するを得しめ、その後、又、一步を進めて、漢字

まじりに活用し、國語を経とし、漢字を緯とし、國語を主とし、漢字を客として、更に、一層の便利を感じせしめたり。

假名の使用は、一般に、便利を感じせしめたるにかかはらず又、その使用法の、更に、一步を進めて、漢字まじりの物語體となり、いよいよ、便利を加へたるにかかはらず、當時にありては、猶、女文と稱せられて、朝廷の公文に用ゐられざりしのみならず、鎌倉の武力第一の時に於てすら、政府の記録、及び、裁判申

渡は、拙劣なる文章生、又は、僧侶の手を假りて、鵠の如き漢文を用ゐたりき。徳川氏にいたりてはいかに。林道春は、東照公の命を奉じて、信長譜、秀吉譜を編述せしに、なほ、漢文を用ゐたり。余が、尤も惜むところのものは、水戸義公の大日本史を編纂せらるるにあたり、三宅觀瀾の如きは、國文を用ゐむとの議を建てしも、當時、多數の勢に制せられて、遂に、漢文を用ゐるにいたりしことにして、氣運の、未だ、いたらざりきとはいへ、遺憾のことなり。思ふに、幕政

三百年の間、文人彬彬輩出して、漢文の著述すくなくからざりしも、帆足萬里は、猿の狂言なる一語を以て、これを冷遇したるにあらずや。

もし、徳川氏のはじめに當りて、一の豪傑ありて、漢文の、遂に、國語と一致すべからざるを知りて、國文の體を一定し、公文に、歴史に、教育に、これを用ゐしめたらむには、その間に生れたる俊才の士は、青年の精神氣力を、カレイン・マクドナルド 信嘯艱難なる漢文の修業に用ゐずして、他の有用なる事業に用ゐる、三百年の文運は、クエーン 駸

駸として、一層、高度の進歩に達したりしならむ。要するに、わが國民が、國文、國語における固有の特性は、ながき年月の間、一種の事情のために、發達を妨げられつつ、經過したりしは、歴史の證明する事實なり。(梧陰存稿)

言語の保護

落合直澄

本邦語は、一種の格を備へたるものにして、支那語とは、大に、その趣を異にせり。西洋語は、過去、現在、未來、自他を區別する規則、やや、本邦語に近しいといへ

ども、猶、本邦語の如く語尾をうごかして、過去、現在、未來、自他を區別するが如きものにあらざるなり。唯、朝鮮に、語尾をうごかす語ありといへども、それも良行に限れりと聞けり。要するに、本邦語は、一種の言語にして、支那より轉訛し來れるものにあらず。もとより、西洋語より變化し來れるにあらず。又、その規則、決して、後世の作爲に出でしものにあらずるなり。

されば、その起源、最も古く、これ實に、神定の規則と

いはざるを得ざるなり。然るに、本邦の文物文學は、大に發達せりといへども、本邦の正格なる言語は、漸く、變化して、現時の普通語の如きは、支那語、その過半を占むるなり。されど、いかなる田夫野人と雖も、この法則によらざれば、談話をなす能はざるなり。いかなる學者と雖も、この法則をすてては、帝國に立つ能はざるなり。余は、本邦語に於て、この規則の、容易に廢滅すべからざるを知り、聊か安心せり。然して、余は、文人墨客の、地名を紛亂するを歎く。そ

の一例を擧ぐれば、富士山を芙蓉に作り、隅田川を墨水に作るが如き類、これなり。又、人名の讀法を示指せざるを惜む。その一例を擧ぐれば、宋戸殘氏の殘字の如き、一般に、タマキと讀めり。實は、ナガタマなりとか。この類、甚だ多し。或は、音訓、他の稱呼に任せて顧みざるものあり。世界廣しといへども、かかる不完全なる名稱を用ゐる國は、また、あらざらむ。かへりて、下等人民に於ては、然らざるものあり。八兵衛をヤベエとはいはざるなり。又、黒をコクとい

はば、犬だにもこれに應ぜむや。唯、わが中等以上の者にありて、この弊多きは、惜むべきなり。余、古書を讀むごとに、地名人名の讀法、判然し難きに苦み、古人の不注意を恨みしが、過去のごとは、いかにいふも詮^セなからむ。ただ、現時に力を盡し、後世に困難を殘^{カクサス}さざらむことを望むものなり。(楳舎文集)

學者の本領

内 藤 正 直

古の學者は、他の國國の書を讀むことも、至りて博く、隨ひて、他の學術教法をも、十分に講究したれど

も、決して、日本學者たる本領を失ひたることを聞かざるなり。就中、眞正に、日本學者たる本領を失はざる學者といふべき者は、菅原道眞、大江匡房、北畠親房の三公ならむか。

道眞公は、菅原氏にて、代代、文章博士の家業を傳へられたる家なり。されば、その讀むところ、學ぶところは、もとより、多く漢土の經籍なるや疑ふべくもあらず。かつ、そのころ、わが邦の史傳は、極めて少なく、律令格式とても、至りて多からざる世なり、故に、

これらは、讀みつくされ、講究せられたる、その上に、猶、廣く漢籍を讀み、志かのみならず、佛書等をも、讀みあきらめられたるべければ、もし、今の學者のごとく、本心を失ふことならば、とくに、漢土人に化し去るべき理なるに、公は、決して然らず、その學問こそ、漢籍によりたれ、その文章こそ、漢文なれ、その身の朝廷に仕へまつりて、聖主宇多天皇の叡慮を奉體し、力を盡し、心をくだかれたるところを見れば、徹上徹下、純一純粹の日本魂にて、一點一毫も、漢

土風のけがらはしきことなし。ことに、わが神聖なる國體を尊崇せられ、天皇陛下の御權力を張りて、相門の權勢をおさへさせられむと謀られしことは、歴史上に明なることなり。これ、その學問する所は、漢籍、漢文、又は、天竺の書なれども、少しも、これがために、本心を取り失はれず、全く、舊來の大和心を以て、朝廷に盡されたる事なれば、これをこそ、日本學者の本領ある人といふべきなれ。公にして、もし、その本心を失ひて、儒家に耽溺せられたる人なら

しめば、かの相門の隆盛をも、漢土の禪讓などになぞらへて、少しも、怪まざる様のことなしともいひがたかるべきに、聊も、さる汚しき行はなく、かへりて、これがために、冤罪に陥りて、遠國に謫せられたるなど、實に、學者の手本とすべき人ならずや。次には、匡房公なり。この人も、累代の儒家より出でたるのみならず、自分も、儒業を以て、及第立身せる人なり。されども、その皇家に奉仕したる、一代の所業を考ふるに、實に、敬すべきものあり。公、始めには、

山林に入りて、世を遁れむとせられたるも、後には、出でて、後三條天皇の東宮にましまししとき、その侍讀となり、かねて、天皇の勅旨をも知り奉りたる故に、専ら、啓沃に心を盡され、さしも隆盛なりし時代の藤原氏の大權をも、一朝に、皇家に回復せさせ奉りし、そのころざしのほど、思ひやるべきなり。さればこそ、天皇即位の初めより、藏人の職に任じて、夙夜陪侍、機密の事に參し、顧問に供せられたるなれ。これまた、その人は、儒家に出でて、漢學者なれ

ども、すこしも、漢學風に流れず、日本心の卓然たることは、明に、知らるべきなり。されども、後三條天皇には、はや、崩御になりて、その御志も、空しくならせたまひし故に、匡房公の忠功も、世に、大に顯れざることとはなれり。さはいへ、延喜已來、とり失はれたる政權を、一時に、回復せられたることは、容易のことにはあらざりしならむ。これも、漢土風の心にて、深く、わが國體をもおもはぬ腐儒者ならば、必ず、袖手傍觀してもあるべき理なるに、さはなくして、

かくの如き忠勤をいたされたるなど、これまた、實に、日本學者の手本とすべき人ならずや。

次には、親房公なり。この公は、儒門といふにはあらざれども、代代、文學を以て世にきこえたる、北畠氏の家に生れられたるなれば、これまた、儒學にも、佛學にも、深きことは勿論、古今に稀なる學者なり。然るに、後醍醐天皇の思し召したたれたる、北條氏討滅の事につきては、始めより、その謀議に參與せられ、ことさらに、出家して、武家の嫌忌を避けられ、竊

に、謀議を助けられたることは、いふまでもなく、尊氏の叛亂を企つるに及びては、志ば志ば、艱難にあたられたるのみならず、その子息たちは、戦場に臨みて、討死せられたるもおほく、終始、志を變ぜず、芳野朝廷のために、子房の謀を廻らし、諸葛の忠を致されたること、これまた、歴史上明なり。その忠肝義膽、智略勇略、ともに、千古に照映すといふべし。もし、この人も、漢風に耽溺したる人ならむには、かの湯武の放伐などいへる、大惡事をも口實として、尊氏

に荷擔せらるるが如きことなしともいひがたかるべきに、公は、決して然らず、艱難辛苦の中に、身を終へられたるなど、これまた、實に、日本學者の手本とすべき人ならずや。

建武中興論

井上 毅

世に、後醍醐天皇の中興の大業、なかばごろにして、廢れにたることを、くちをしきことに思ひて、朝廷の賞罰、正しからざりし故なりなど、論ふものあり。こは、ただ、成敗の事の迹をもて、推し測れるにて、そ

のかみのありしさまを、深くも、考へざるものなりけり。いでや、その世の、人情風氣の、いたく、なり沈みたるさまの、一二を、挙げ示して、書讀む人だちを、うちおどろかさむ。

天皇の、隱岐の國に、いでましける時、隱岐の判官は、鎌倉の下知をうけて、三千の兵もて、守りたてまつりけるに、兒島の三郎が、天莫空勾踐時、非無范蠡とものせるを見て、判官をはじめ、數多の兵ども、その心をさとするものだになかりしかば、天皇、ひとり御

心にうなづき給ひきと、太平記に見えたり。いかに、猪武者なりとはいへ、こればかりのことを、えさくらぬなど、その時の人人の、ものまなびに暗くして、物の理を辨へつべくもあらざりしさま、思ひはかるべし。されば、建久このかた、武家の世となりしより、おしなべて、士といはるるほどのものは、ひたすらに、弓矢もて、おのが莊園をば取られじ、人の闕所をば押領せばやとのみ、心がけたるは、さながら、夜見の國に、醜女どもの集ひ荒ぶるに異ならずなむ。

律生^{ハクシ}ひまげり、道もわかずなりぬるを、正しきすちに引きかへして、二たび、大御稜威を輝し給はむこと、かたしともかたき御わざならずや。時いまだいたらずして、再び、世の中の亂れにたるは、あながちに、この君の御はからひのあやまちにはあらじ。いづれの國、いづれの世も、おしなべて、あしきさまより、善きにうつりかはるきには、教といふものさきだちて、人人の心を導き、まづ、その根本を養ひなすなり。然るを、この教といふものの、あるべなかり

せば、いかに、すぐれたる君、かしこき大臣の、世に出で給ひて、大御はからひなし給ふとも、おぼつかなくぞおぼゆる。

鎌倉このかた、世に、正道の道志るべするものなく、大義名分は、夢にだに、知らぬ人人のみなり。承久の亂のをり、二位の尼の、さかしらに、たくみたることばに、鎌倉十萬の武士たちは、涙にひちて、かごでせりといへり。太平記、光嚴院重祚の段に、そのころ、物もおぼえぬ田舎のものども、そぞろなる物語しけ

るにも、あはれ、この時、持明院ほど、大果報の人は、おはせざりけり、軍の一度をも志給はずして、將軍より、王位をたまはらせ給ひたりと、申し沙汰しけると見えたるは、いかにあさましき世のありさまならずや。これぞ、教なき世の極みなるべき。かかる世をあらしめし給ひて、俄に、大御稜威をふり起さむと志給ひしは、いともかしこきおほみわざにこそ。尊氏に、御諱の一字を賜ひ、三位にさへ進め給ひしは、武士どもの心を慰め給ひて、徐に、おきてさせ給

はむとのみはからひとぞ覺ゆる。さるを、こは、その時のやむことを得させ給はざりしなるべしなど、いひなせるは、その時のまことの有様をえ知らぬふみのかきざまどこそいふべけれ。神皇正統記に、建武のあやまちをあげつらへるに、尊氏をはじめ、武士どもを、清華門院の上に加へられしをば、ひがごとにいひなせるは、この卿の職原鈔を書き給へるころばへとおなじく、有職家の一家言にして、中中に、公論とはいひがたかるべきか。(東洋學會雜誌)

學者の心得

八田 知紀

學問の道は、藝道より徳行に進むことなれば、文武とも、修行中、國體の根本をあきらめ、内外本末を知り、天下の事情に通達すべきやうの心得、專要なり。尤も、書籍は、和漢にわたり、かぎりなきものにて、いづれも、一理一得あるものなれども、ことごとく、信ずべきにあらず。早く、その要旨を取り、博雜ならざるやうの心得、第一なり。もとより、天下の博士となるべき人才は、格別なれども、諸藩士は、文學を専門

とすることかなはざれば、まづは、大綱をあきらめ
おきて、實行を宗とし、家業をつとむる外なく、たと
ひ、一文不通なりとも、大活眼を備へて定理を知り、
治亂興廢の時務を辨別する才あらば、君子の人と
いふべし。何ぞ博聞強記をたのまむ。(桃岡家訓)

わが幼時

新井白石

わが幼き頃、上野物語といふ草紙ありけり。これは、
寛永寺の花見に、人の群れ來る事どもを記せるな
り。わが三歳なりし春の頃にやあるべき、火燵に足

をさして、腹ばひ居て、その草紙を見ながら、筆紙を
もとめて、透寫えけるを、母にておはせし人の、見た
まひて、十の中一二は、誠の文字もあるを、わが父に
見せ進らせられしを、父の友なる人の、來り見しよ
り、人人も、聞き傳へて、その寫しし物どもを、取り傳
ふることになりたり。わが、十六七歳の時、上總の國
に行きしに、かしこにて、その頃、寫しし物を見るこ
とを得たりき。又、その頃、屏風に、わが名を題せしに、
二字は、その體をなしたる者の、後までありしが、火

に焼け失せたりければ、今は、その頃の物は、わが許には残らず。

この後は、常の戯に、筆執りて、物書くことのみを志ければ、自ら、日に、文字をも見知りたれど、物讀む師友とすべき人なかりしかば、只、往來物の類などを讀み習ふのみなりき。戸部の家人に、富田とて、生國は、加賀の國の人と聞えしが、太平記の評判といふことを傳へて、その事を講ずるあり、夜夜に、わが父など、寄り合ひつつ、その事を講ぜしめらる。わが

四五歳の時、常に、その座に侍りて、これを聽くに、夜いたく更けぬれど、終に、その座を去りしこともなく、講畢りぬれば、その義を請ひ問ふことなどもありしを、人人、奇特の事なりといへり。

六歳の夏の頃、上松といひし人の、少しく文字などありしが、七言絶句の詩一首教へて、その意を解き聞かせしに、やがて、誦をなしければ、三首まで教へられしをば、人にも講じ聞かせたりき。この兒、才あり、いかにも、師を擇びて學ばしめらるべしなど、か

の人もいひしかど、頑なる昔人たちのいひしは、むかしより、利根、氣根、黄金の三こんなくしては、學匠になり難しといふなり。この兒、利根こそうまれつきたらめ、なほ、いとけなくして、その氣根の事も計りがたく、家富めりとも見えねば、黄金の事も心得られずなど、いひ合へりしに、わが父も、戸部の御いつくしみによりて、常に、御側を離れまゐらせず、學に入れ、師に従はしめむことも叶ふべからず。されど、幼より、物書くことをば、戸部も、人人に語り誇ら

せ給ひしことなれば、せめて、物をば書き習はしめたくこそ侍れとて、わが八歳の秋、戸部の、上總の國に行き給ひし後にて、手習ふ事を教へしめらる。その冬の十二月半に、戸部、歸り給ひしかば、常に、傍に侍ふこともとの如く、明年の秋、又、國に行き給ひし後にて、課を立てられて、日の中には、行草の字三千字、夜に入りて、一千字を、限りて、書き出だすべしと命ぜられたり。冬に至りぬれば、日短くなりて、課、未だ、満たざるに、日暮れむとすること度度にて、西向

なる竹椽の上に、机を持ち出でて、書き終へぬることもあり。又、夜に入りて、手習ふに、睡の催して堪へ難きに、我に附けられし者と、竊に計りて、水二桶づつ、かの竹椽に汲み置き、いたく睡の催しぬれば、衣脱ぎ棄てて、先づ、一桶の水をかぶりて、衣うち着て習ふに、初め、冷なるに、目覺むる心地すれど、暫し程經ぬれば、身暖になりて、又又、睡くなりぬれば、又、水をかぶること前の如くす。二たび、水をかぶりぬる程には、大やうは、課をも満てたりき。これ、わが九歳

の秋冬の間の事なり。

かかりし程に、この頃よりは、わが父の、人に贈り給ふ文をば、かたの如くには書きたり。十一歳の秋、又、課を立てられて、庭訓往來を習はしめられ、十一月に至りて、十日の内に淨寫して進らすべしと命ぜられ、命ぜられし如くに、事を終へしかば、冊になして、戸部に見せ進らす。褒め給ふこと大かたならず。十三の時よりは、戸部の人と贈答し給ふ程の文ども、大かたは、われに命ぜられき。

又、十一歳の時に、わが父の友の、關といひし人の子供は、太刀打の技に勝れて、人に教ふことありしを、われにも、この技教へられむことを望みしに、わぬし、未だ幼し、是等の技學ばむこと遅からずといふ。そこそは侍るべけれど、太刀使ふこと、少しも心得ざらむには、刀、脇差、腰にせむこと、誠に、不用の事にやといひしかば、のたまふところ、誠に然なりとて、一つの技を傳へて習はしめたり。

かかりし程に、その年、十六になりし者の、われと藝

を試みむといひしかば、木刀を取りて、三たび合ひて、三たびまで、勝つことを得たりしにぞ、人人も、亦興に入りて、笑ひたりける。その後は、常に、かかる武藝の事どもを好みて、手習ふことなど、心にも染めずありしかど、物讀むことはこのみければ、殆ど、わが國の物語、草紙等の類をば、見ずといふ者もなかりき。(折燒柴の記)

習字

本居 宣長

よろづよりも、手は、よく書かまほしきわざなり。歌

よみ、學問などする人は、殊に、手あしくしては、心劣りのせらるるを、それ、なにかは苦しからむといふも、一わたり、理は、さることながら、猶、あかず、うちあはぬ心地ぞする。宣長、いと拙くて、常に、筆とるたびに、いと口をしう、いひがひなく、覺ゆるを、人の乞ふままに、おもなく、短冊一ひらなど、書き出で見るにも、我ながらだに、いとかたはに、見ぐるしう、人やいかに見るらむと、はづかしく、胸痛くて、若かりし程に、なごて、手習はせざりけむと、いみじうも、悔しく

てなむ。(玉勝間)

作文

山縣 周南

文を作らむと思はば、まづ、題に對して、主意を立つべし。これ、一篇の文字の種子なり。主意、すでに、出來たらば、首は、何と言ひ起し、中にて、何と言ひひろげ、尾にて、何と言ひ收むべしと、首、中、尾の分段を、布置すべし。これにて、一篇の體、立つなり。分段、すでに、定らば、筆をとりて、心にまかせて、さらさらと、書き立つべし。この場にて、苦思澁滯すべからず、苦思澁滯

せば、一篇の氣脈貫通せず、章段支離して、體をなさざらむ。故に、書きたてたる上にて、ひたすら修辭潤色し、つとめて、卑俚の語を除き、典雅の辭を擇び、また、繁冗なるところを點檢して、十字二十字の句を、五字七字にもつづめ、五百字七千字の篇を、二百字三百字にもつづむべし。古文は、辭簡潔にして、義理深長なるを貴ぶ。支那の文も、宋元の文は、冗長なり。試に、古文の辭を以て、つづめて見よ。いかほども、つづめ得らるべきなり。(作文初問)

文字の死活

菅 茶 山

書札の文字にも、死活あり。たとへば、一筆啓上仕り候ふより、御無事、御堅固云云、私宅恙なく、時候御自愛、猶、後音を期す云云は、書くも書かざるも、なに程の事もなきなり。さるを、この間の寒氣は、我郷は、海濱に氷を見、或は、半月一月の早なるに、餘所には夕立すれども、ここには降らずなどいへば、同じ寒暖を叙ぶるにも、その地の氣色も想ひやられて、書狀の文字を活かすなり。月日の末に、この書認めたる

時は、雨あきりに降り、杜鵑、二聲三聲、音づれぬなど、
書きたるは、いよいよ、その時、その人の姿も、思はる
るやうにて、面白し。長と三尋あまりある書札にて
も、死にたるあり。三行四行の書にても、活きたるあ
り。注意すべきことにや。(筆のすさび)

室鳩巢に與ふる書

新井白石

昨日の御報拜誦、驚愕是非に及ばず候ふ。然りとい
へども、火急の處に、御全家御異狀なきことを、この
上の多幸と思し召さるべく候ふ。但し、をしむべき

此レヨリニペ
ージハヤナ

ことは、多年御拮据候うて、御求め得し御書籍と、御
手録との事、承り候ふだに、心を苦め候ふ。これも身
より外のもの、是非に及ばず候ふ。貴兄、既に、御學業
も成就候へば、これより後、書籍をたのみて、たのま
ぬことに候ふ。令郎、いまだ、御學問未成業の御こと
に候へば、せめて、書籍をば御残し候ふ御はからひ
の事、強ちに、俗輩、買田問舍等の事に比すべからず
候ふ。某、家藏の書、もとより多からず候へども、二重
になり候ふもの、少少これあり候ふ。書目の簿も、な

にの内にやらむ入れおき候ふ故、昨夜、尋ね候へども知れず候ふ。されど、覺え候ふ處は、監本四書、茅鹿門史記、漢書などこれあり候ふ。即ち、令郎へ、これを進ずべく候ふ。この外の書、恩賜のもの外は、なににても、御用次第、御貸し申すべく候ふ。御事もかかせまじく候ふ。この節も、手前の事、御物語申し候ひし通り、十分なる御用には、立ち候はねども、いささか位は、恩賜のもの、なほ、これあるべく候ふ。御心おきなく、仰せ下さるべく候ふ。廉潔をたて候ふも、事

にもより、相手にもより候ふ。尋常同門も、兄弟の親に同じく候ふ。況や、ただに、同門と申すばかりにもこれなく、春風與子同胞と申すは、この事に候ふ。仰せ下さるる、すこしもすこしも、御はづかしかるべき事にもなく候ふ。早早。(白石自筆書簡寫)

書籍の貸借

本居宣長

珍しき書を得たらむには、親しきも、疎きも、同じ志ならむ人には、見せもし、寫させもして、世に、廣くせまほしきわざなるを、人には見せず、おのれのみ見

て、誇らむとするは、いといと、心きたなく、物學ぶ人の、あるまじきことなり。但し、得がたき書を、遠くたよりあしき國などへ、貸しやりたる、或は、道の程にて、はふれ失せ、或は、その人、俄に、亡くなりなごもして、遂に、その書返らずなることあるは、いと心うきわざなり。されば、遠き境より、借りたらむ書は、道の程のことも、よく認め、又、人の命は、俄なることも、はかりがたき者にしあれば、なからむ後にも、はふらさず、確に、返すべく、控へ置くべきわざなるを、久し

く止めおくは、心なし。さるは、書のみにもあらず、人に借りたる物は、何も何も、同じ事なる中に、いかなればか、書は、殊に、用なくなりて後も、なほざりにうち捨ておきて、久しく返さぬ、人の、世に多き者ぞかし。
止(玉勝間)

長幼の序

松平樂翁

長幼の序とは、年たけたるを敬ひ貴び、その次第を正しくして、禮を盡すをいふ。かりそめにも、長者を輕しめ侮り、有司を畏れず、無禮緩怠なるは、甚だ、あ

年たけたるを敬ひ貴び、その次第を正しくして、禮を盡すをいふ。かりそめにも、長者を輕しめ侮り、有司を畏れず、無禮緩怠なるは、甚だ、あ

しき風儀なり。

禮は、すべて、人間の人間たる儀式作法にて、平日の立居振舞より、物言ひまでの、致し方なり。古人も、鼠だに皮あり、人として禮なくば、何ぞ早く死なざると言ひて、深く憎みたり。然るに、長者を輕しめ、先に立ち、口答などするは、甚だ、あしきことなり。君父に事ふるにも、君父に事ふる禮あり。師に事ふるにも、師に事ふる禮あり。師といふは、能く物を識り、人の惑を解く者にて、君父に事ふる道も、師にあらざれば、明ならざるものゆゑ、取り分け、尊ぶべきものなり。その人の、位の高下にも拘らず、道ある人は、臣下にても、尊び給ふなり。されば、禹王は、天子の尊きも、昌言をいひきかする人あれば、自ら、拜禮して受け給へり。かやうに、師を尊ばねば、道を尊ばざるなり。道を尊ばざれば、却りて、わが身を賤むるなり。相對して尊ぶは、いふも更なり、文通尋問の禮儀までも、敬を盡すべきなり。

禮儀は、幼年の時より、致し習はざれば、年たけては、

おのづから成り難きものなり。すべて人の大小、衣服などをとび越え、書物などを跨ぎなどするは、いささかのこのこのやうなれども、わるきことなり。言葉つきも、常常、慎みて、下輩なる物言ひはせぬやうに、心掛くべし。

今の童子輩、人の門札に墨を塗り、壁に樂書などするは、戯といへども、たくみたることにて、甚だ、あしき風儀なり。幼年は、戯れ遊びて、元氣なるは、よろしけれど、人の物を隠し、人を誑すなどの事は、わるき

ことにて、たくみたることゆゑ、悪人と成り行くものなり。必ず、慎むべきことなり。(花月草紙)

駿河大納言

新井 白石

左大臣家、竹千代殿と申し奉り、大納言殿、國千代殿と申しし時、御父將軍家、國千代殿を愛せさせ給ふ事深くして、世繼の君にたてむと思し召し定めけるに、竹千代殿の御乳母、春日の局が、御勝の御方につきて訴へしかば、駿河の御所、大に、おどろかせ給ひ、急ぎ、關東にならせ給ひて、なにとなく、竹千代殿

をたふとませ給ひ、國千代殿をば、事ごとに、おし下
させ給ひ、また、内内は、將軍家に、嫡子^{しやくし}を退け、少子を
立てむことは、天下の亂るべき基なりとて、さまざ
まに、御教訓あり。竹千代殿の幼き御心にも、われ、ゆ
ゑなく、退けられむには、父の世のために、長きそし
りを残させ給はむこと、悲しきことなりとおぼし
めされ、御耳のうときやうになされしかど、將軍家
も、大御所の仰せおかれし事ども、思し召し捨てが
たくて、終に、竹千代殿を、御世繼とはなさせ給ふ。こ

ハナカサイ

ヨシヤノ

世にうへにナリノミナ
ミナミナミナミナミナ

ミナミナミナミナミナ

ミナミナミナミナミナ

ミナミナミナミナミナ

ミナミナミナミナミナ

ミナミナミナミナミナ

ミナミナミナミナミナ

れ故に、御兄弟の中も、たひらかならず、大納言殿、終
に、失はれ給ひぬと、世の人、皆、いひも傳へ、筆にも記
せり。これ、うけ難き事どもなり。抑も、大相國家と申
すは、篤恭^{とくこう}の御徳をなはらせ給ひ、近代の賢主にて、
わたらせ給ひし御方なり。いかで、かく、理なき御心
ましますべき。これ、妬言^{とごん}深き、婦人女子の口より出
でて、物の心をも、わきまへぬ人の、私の腹をもて、公
なる御心をはかれるより成りし説なるべし。今も、
世にある事にて、さらぬいやしき家にも、かかる一

その故は、國千代殿、いとけなく、わたらせ給ひし時、
鐵砲うつ事を、稻富に學ばせ給ひ、元和四年十月九
日、西城の隍の邊に、鴨の出でてありしを、こなたの

本丸
面デヤカタニテ車ニ乗
土、デ、新テニヤリ
本丸ヤ、新テニヤリ
つて、新テニヤリ

ヒヨウノ人ンセ
ウラノ人

親王、ヨクサマノ
トナリニガ
ノヤ將軍ヨヨク
サント云フ

七
 下
 イ
 ナ

不思議をぞ、ふるまはせたりけむ。抑も、わが城は、父御所の、新に、築かせ給ひて、われに譲らせ給ひ、われまた、竹千代殿に参らすべき所なり。それに、國千代が身として、その城にむかひ、みづから、鐵砲をはなつこと、上は、天道にそむき、かつは、父御所の、神慮のほどもはかりがたし。下は、竹千代殿の聞きたまはむことも、その憚なきにあらずと、以ての外に、御氣色そこねて、御座をたたせ給ひ、その日、かの御供に侍ひし人人、ただされて、御不審をかうむる。その時、

キ、テモ
トウ、ハン、フ
ハ、ナ、イ
ウ、キ、ニ、ナ
ツ、タ
ヲ、ト、カ、ナ

御前にありし女房たちの、後に老いて、家にありしが、御臺所の御方にて、仰せられしこと、かかりとは語りしなり。又、この物語は、世にもあまねく、知れる所なり。この言葉にて、誠に、深き御心の中を、おしはかりなば、世の傳ふる所の、聞きひがみなるを、知るべきなり。その外、この殿の事につきては、御父子兄弟の御中の事ども、いろいろ、世に傳ふる事あり。すべて、うけがたき事どもなり。(灌翰譜)

兄弟

松平樂翁

兄弟は、父母を同じくして、生るる者なれば、同根連枝といひて、木の根を一つにして、枝葉のわかるるに譬へたり。いづれの枝にても、惡しとて伐り捨てなば、幹のいたみとなるべし。幹傷む時は、諸の枝葉も、共に、凋み枯るることなり。俗諺にも、兄弟は、十の指の如し、十の内、いづれの指わろしとて、一本も切り捨てられずといへり。

されば、相互に、睦ましく伴ひ、兄は、弟をいつくしみ、弟は、兄を敬ひかしづきて、悌順の道を盡し、兄、過あ

らば告げ、怠あらば助けはげまし、相共に、身を立て、道を行ひ、父祖の名を揚げ、家名を墜さぬやうにすべし。

殊更、父母、身まかりて後は、二たび、父母に見ゆべきよしなし。年を経るに隨ひて、面影も、臙に成り行くべし。子は、父母の遺體ともいひて、分ち残せる體なれば、兄弟は、互に、父母の形見とも見て、親み睦ぶべきなり。かくのごとくならば、おのづから、父母の遺靈も悦び、天道にかなひ、聖人の道に違ふことなけ

れば、兄弟、おのおの、榮えつべし。

殊に、多からぬ兄弟は、一志ほ、睦ましかるべし。世に、兄弟ほど、なつかしくたのもしきものは、あるまじきなり。故に、孔子の弟子司馬牛は、皆人、兄弟のあるを見て羨み、おのれひとり、兄弟なきを憂とせり。中にも、男子の兄弟は、あり難く、たのもしきことかぎりなし。互に、睦ましく助け合ひて、家の風を、長く吹き傳ふべきなり。

高貴の御方にありては、その附添の人も多ければ、

中には、奸人もありて、兄弟の中言をいふものなるが、それを聞きては、疎ましくも、または、疑はしくもなりて、互に、心を、隔つるにいたることあるものなり。ことに、戒むべきことにこそ。(燈前漫筆)

陰 德

貝 原 益 軒

陰德は、富貴なる人のみ、行ふべきにあらず。貧賤の人といへども、その志あれば、行はれずといふことなし。いかにとなれば、金銀米穀を、多く、みだりに、人に與へ、無益のことをなして、たからを費すを、陰德

といふにはあらず。ただ、わが分限に従ひ、力の及ぶ
 ほど、施し恵むべきなり。故に、せめて、わが身の奢と
 欲とに、財と心とを用ゐる十分が一の力を費さむ
 には、その救ひ施すこと、實にひろかるべし。仁愛深
 くして、久しく、陰徳をつみ行へる人は、その恵を受
 くる人の、よるこぶのみにあらず。そのこと、天地神
 明の御心にもかなふべき道理なれば、必ず、天道の
 むくいありて、たびたび、禍をのがれ、子孫も、永く榮
 えたのしむこと、理あきらかにして、古今和漢、その

ためしいと多かり。こはこれ、人生無上の幸にして、
 いかなる幸といへども、これにまさることはまた
 なからむ。

人を救ふ道は多し。飢ゑ凍えする人を助け、鰥寡孤
 獨の、寄りどころなきものを恵み、位あらば、善人を
 すすめ、悪人を去りぞけ、才能をとりあげ、人の害を
 除き、人の利をおこし、ひろく、民を救ひ助くべし。位
 なくとも、人をあはれむ心は、おなじかるべし。人の
 財を費さしめず、人に、苦勞をなさしめず。財を借り

たれば、早く返して、人の累をなさず、老人、病人は、いたはり、かたはなる人は憐み、人をねたまず、人ををしめず、善を勧め、惡をいましめ、人を教へ、人をくろしめず、人の虐げられたるをことわり、人の怨み憤るを解き、力あらば、道路橋梁を修理して、往來のなやみなからしめ、又は、禽獸虫魚を、漫に、ころさず、草木をも、濫に伐らず。すべて、かやうのことを、陰徳とはいふ。これ、人を憐み、物をめぐみて、天道につかへまつることなり。陰徳を行ひて、久しきをつめば、必

ず、そのむくいを求めずとも、後に必ず、天道のめぐみありて、志ば志ば、禍をのがれ、福壽を増し、その家榮えて、子孫に幸あり。これ又、天道の善に幸し給ふ道理にして、古今和漢の志るし多きこと、あげて數へがたし。疑ふべからず。貧賤の人すら、陰徳を行へば、そのむくい、かくの如し。況や、一郡一郷を領し、或は、つかさ位たかき人は、下を安んじ、民を養ふを以て、職分とすること、これ、天より命じ給ふところなり。常に、心を用ゐて、天意に従ひ、民をあはれみ、困苦

を救ひ、政を起し、仁を施さば、そのいさを大にして、天道のむくいも、また、かぎりなかるべし。

富貴の人、おほくは、陰徳の行ふべきことを知らず。勢に乗じて、下の苦も顧みず、人の費もいとはず、わが身ひとつの榮華を極む。陰徳なくして、天地のいかり、人民のうらみ、つもりて後は、凶事出でて、子孫にも、その禍を遺すものなり。天道、まことに、おそるべきかな。又、陰徳を行はずして、鬼神に詣り禱りて、幸をもとめ、凶事をのがれむとして、無益の事を

なし、民を苦めて、財を費す。これを頼みて、凶事をまぬがれむとせば、天地神明の御心にそむきて、却りて、凶事あり。又、むくいにあはむために、幸をもとめて、善を行ふは、これ、利欲の心より出でたり。悪を行ふには、まされりといへども、まことの陰徳にはあらざるなり。(五常訓)

正直なる父子

松崎堯臣

京なる商家二人、江戸に下りしが、阿部川を渡りて後、一人、懷中なる金をおとしぬといひければ、とも

ども、立ち歸りて、河原を、彼方此方と、たづねさまよひけるに、ややありて、いと若き男の、走せ來り、若し、物もや落し給へる。その袋は、我等ひろひたれば、主を求めて、返し贈らむとて、急ぎ參り候ふ。まゐらせむといふ。そは、おもひも寄らざる事にこそ。その金、少しなれど、わかちて贈らむなどいへば、いやとよ、某は、川ごしにて候ふが、さきに、この川岸にて、こを拾ひ得て、主も知れざるものなれば、幸を得たりと思ひ、急ぎ、家にかへりて、見せ候へば、父、大に怒り、い

づこより盗み來れるかとて、打擲せむとせし故、事のよしを語りたれば、主、おれずとて、人の落したるには紛れなし。その人をたづねて、返さむとは思はずして、歸り來れること、即ち、盜賊なりとて、追ひ出だし候ふ故、足をそらにして、主を尋ねに出でつるに、幸に、ここにて返し得たれば、親の責をも、まぬがれ申すべきこと、これに過ぎたる喜はなし。されば、祝ひ候はむとて、酒肴を調へて、二人をもてなしなごす。二人は、感に堪へかねて、その男とうちつれ、父

なる人を訪ひて、そのよしを述べ、禮のためにとて、金を少し贈らむといふに、容易に、うけがはねば、せむ方なくて、下りぬ。阿部川の村老など、この事を、奉行所に告げたるに、松浦公、その親子の正直なるを愛でて、褒美を賜ひしが、そのよし、高聽にも入りて、又、物下し給ひ、殊の外に賞せられけり。元文四年の事になむ。窓の須佐美

浪士賊に遭ふ

松崎堯臣

ある士、上方に仕へけるが、仔細ありて、あばし、影を

隠し、江戸へ下りなむとするに、さだかに宿ることなく、木蔭岩間に、夜を明し、やうやう、駿河まで、來りしが、心地そこなひて、せむかたなく、木蔭にやすらひ居たるを、旅僧たちよりて、藥あたへなどしければ、力出できて、去らむとするに、かの僧、この有様、殊の外、あはれに見ゆ。江戸まで路金ありやと問ふ。何の心あてもなしと答へければ、金一片を出だして、これにて、凌ぎ給へ。我は、増上寺の所化寮に、何某と申す僧なり。都に上り、やがて、下り申すべければ、用

事あらむには、尋ね來給へといひて、別れけり。さて、箱根路にかかりて、本道は、關所の通路あれば、本箱根といふ所を通るに、山間いと險しくして、日は暮れかかり、行きなやみたるに、ゆゆしき男三人居けるが、酒手をあたへよといふ。見らるる通り、衰へ果てたる我なれば、何をあたふべきやうなしと答ふるに、さらば、その刀を出だすべしといふ。そは餘りなり、士の刀を、わたすべきやうなし。さりて、皆皆も、どちらでは措くまじ。さらば、我身の盡くるまでは、

闘ふべし。よわりたる時、とられよといへば、三人、詞を改め、尤のことなり。見申すところ、よしある人に見えたり。先づ、たばこ召さるべしといふに、立ち寄りて二三ぶく吸ひたるに、さて、此處を、御過ぎ候ふとも、先にも、二箇所まで、あしき所の候へば、今夜は、我等が、宿申すべしとて、伴ひ歸りて、慇に、もてなし、翌日、難所を過ぐるまで、おくりの人を附けて、つかはしけるとぞ。こは、余が親しく知れる人にて、寛保二年の事なり。(窓の須佐美)

刀 劍 その一

新井 白石

わが朝の刀の制は、世に勝れたるものとて、或は、日本刀ともいひ、或は、大和刀とも名づけて、古より、歌にもつくり、書にもある志しもの、世世に絶えず。我國のはじめ、天目一箇の神、作金となされたりしより、後、人皇第十代の朝廷の御時、その神の初子して、天叢雲劍うつされて、後の寶劍をば、作られたりけり。この後の寶劍作れる工は、大和の國、宇多郡の人、天國といひしなど、世には傳へたれど、平家重代の

寶、小鳥といふ太刀には、大寶三年天國といふ銘あり。大寶といふは、第四十二代の朝廷の、年號なれば、天國といひしは、後の寶劍作りし人にはあらじ。後の寶劍は、大和の國、宇多郡にて、作られし由、見えたれば、かの天國といひしも、天目一箇の神の末にて、後の寶劍作りし人の、子孫にてこそあるべけれ。かくわが國にては、これらの工も、多くは、天地の神の末にて、世を累ねて、その業を墜さざりければ、おのづから、それが中には、すぐれて妙なる工も、すくな

からず。世の寶となれる大刀、小刀の類、古今に、その名聞えしも多かり。萬國の中に、わが國の製に、まぐものなしと、他國にていひけむこと、理にもありけり。かの四十二代の朝廷に、撰ばれし令には、凡て、軍器を營み造らむに、皆、すべて、様によりて、年月、及び、工匠の姓名を、鐫り題せしめよと見えたり。されば、天國より、後の代の工のつくれる大刀、小刀には、年月姓名を鐫りしこと、令に見えしが、ごとくなれば、その工の巧なるも、拙も、その代の遠きも、近きも、つ

まびらかなれど、天國より、さきの代の物は、さだかならず。

かくて、八十二代の帝、後鳥羽院の御時に至りて、鎌倉の故將軍のぞうは絶えぬれど、平義時が、陪臣の身ながら、猶、天下の政を出だしけることを、憤らせ給ひ、御讓位の後には、ひたすら、かれを誅し給ふべき叡慮おはしまして、もののふの道に、御心をよせられたりけるほどに、かねよき刀をも、求めさせ給はむとの御事にやありけむ、則宗、貞次、延房、國安、恒

次、國友、宗吉、次家、助宗、行國、助成、助延などいふ、當時に名高き、鍛冶の工、十二人を撰ばれて、十二月に分ちて、院内に番上せしめ、多くの刀を作らせられ、上皇、又、御手づからに作らせ給ふ物も、ありしなど、いひ傳へたり。この事、さもおはしけるにや。承久の記にも、東國の軍勢、馳せのぼるときこえて、大炊の渡へむけられし、筑後六郎左衛門尉が、佩きたる太刀は、御所焼といふ、きこゆる太刀にぞありける。この御所焼といふは、次家に作らせて、君、御手づから、焼

かせ給ひけりとぞ志るせる。この君の、國國の工、召し集められて、多くの刀、作らせ給ひしこと、異朝にも、傳へ聞えしにこそ、その事志るせる物も、あるなれ。されば、又、大刀、小刀を相することも、昔より聞えたれど、そのかみは、只、その吉凶禍福などを、相することにて、何れの代、何れの國、何某が作れる、眞なる偽なるなどいふことを、鑒み定むることには、あらず。

刀 劍 その二

中頃、相模國の住人、五郎正宗入道ときこえしは、古今に雙なき工なり。この者は、花園院御在位の比の人なりとぞ。正宗、國國を巡りあるきて、その工どもの、家家に傳ふる所をうけて、始めて、筆に志るしぬ。正宗に、男子なければ、近江國、高木といふ所の人、貞宗といふものを養ひて、家をつがす。貞宗が弟子、九郎三郎秋廣といふは、後光嚴院の御時、文和の比の人なり。その時に至りて、二十五箇國の押形といふ物、作りしより、始めて、代をも、國をも、工をも、眞なる、

偽なるをも、知ること、掌を指すよりも、猶明になりぬ。秋廣、このことを、齋藤彈正忠につたふ。宇都宮三河入道といふ者、齋藤に受け傳へて、又、國國を巡りあるきて、その傳へし所を正し、あきらめてけり。この三河入道の時、始めて、大刀小刀の價をば、定めたるなり。これは、東山殿のおほせによれりとぞいふなる。木下美作入道といふもの、三河入道より受けて、齋藤左京進につたへ、齋藤、また、三好下野守に傳へしを、細川二位法印立旨、うけ傳へて、建部内匠頭

には、授けられたり。又、足利殿の代に、妙本阿彌陀佛といふ者の、世世、刀磨くことを業とするあり。これが先祖は、もと、相模國の住人、松田が一族なりしが、足利殿の都に移り給ひし後、これも、都にうつる。妙本阿彌が時に至りて、おのが業の巧なるのみにもあらず、刀、相することも、堪能の者にて、その名を、世にほどこして、家を起したりければ、嫡流の子孫、それが名を、家になづけて、本阿彌とはなりのけり。妙本阿彌が四代の孫、清信といひしが、よく、父祖の業

を起して、入道の後、本光と名のりしより、子孫、又、光の字をもて、名とす。古の刀のよしあし、眞偽をも、價の貴からむ、賤からむをも、鑒み定むること、今は、この流のみぞ、世の鏡とはなりける。ただし、その家にては、妙本阿彌は、龜山院、御在位の比の人なり。又、本光は、普廣院殿の時の人なりなごとも、申すとかや。さらば、妙本阿彌は、五郎入道正宗よりは、猶、さきの代の人にてあるなり。それが子孫、家をうけ傳ふること、この頃まで、十一代なりともいふなれば、凡そ

四百三十餘年が程に、わづか十一代を歴たらむことは、その家の傳ふる所なれど、いぶかしくこそ覺ゆれ。(本朝軍器考)

本阿彌光悅

今井久右衛門

本阿彌光悅が行狀記といへる書を、人に借りて讀みしが、光悅が藝一として、その妙所に至らざるはなし。その手習ふ反故を見しが、一字を數限りもなく寫し置きたり。このやうに、小技と雖も、意を深く用ゐし故、筆道も高く、凡境をもぬけ、ことに、刀劍の

鑒定に妙を得たりしなり。その他、茶事は、遠州に學び、文あり、武あるなど、一時の傑といふべし。その昔、京城の北、鷹が峯は、丹波に續く山繞り、人家稀にして、樹木深く生ひ繁りければ、盜賊、常に、この邊に匿れて、旅人を惱まし、京城などへも入りしかば、關東より嚴命ありて、光悅に、かの地を賜ふ。やがて、光悅、そこに家居せしが、それより、盜賊、皆皆、逃げ去りたりといふ。その武勇、測り知るべし。光悅が、かかる人となりしは、その母、妙秀といへる尼が、教育によれ

りとぞ。(文寶堂遺稿)

細川幽齋

新井白石

丹後の、藤孝入道のもとには、年老いたるものど、い
とけなきものとばかり残り居て、はかばかしく、軍
すべきもの多からず。されども、入道、さる古兵にて、
すこしも騒ぐ氣色なく、宮津の城を捨てて、田邊の
城にたてこもり、かたき遅しと待ち居たり。抑も、こ
の入道と申すは、弓矢打物とりて、堪能なるのみに
あらず、さらぬ小藝にだに、達せずといふ事なく、天

下ならびなき多才多能の人なりけり。中にも、敷島
の道を深く好みて、古今和歌集の秘訣、ことごとく、
この人につたはれり。されば、この度、わが身、討死
したる後、この道、長く、絶えなむことをかなしみ、城
にこもらむとする初め、相傳の書ども取りあつめ
て、大内へ獻れり。かくて、丹波、但馬の軍勢、雲霞の如
くおしよせ、十重二十重にとり巻きて、火水になれ
どせめけれども、入道、ちつともひるまず、防ぎ戦ふ。
かくては、この城、中中、一時に攻めおとさるべうも

見えず。烏丸の右大辨、勅使として、大坂に行きむかひ、輝元、三成等に、勅詔をつたへらる。それ、和歌は、わが國の風として、天地ひらけはじまりしよりこのかた、百王の今に至るまで、その道、永くつたはれり。あかるに、今、いにしへのことをも、歌の心をも知れる人、たちまち、うせなむこと、もつとも、朝家の歎なり。いかにもして、かの二位法印が、つづがなからむやうをはかるべしと宣べられたり。輝元を初めとして、奉行等、謹みて承り、急ぎ、早馬をたてて、寄手の

軍を停む。元より、入道は、今を最期と思ひ切りて、戦ひし程に、寄手、たやすく、引きて歸らむこと叶はず。このよし、又、都にきこえしかば、三條西大納言、綸命をふくみて、丹後の國に下向ありて、すみやかに、勅に應じ、その城を去るべしとありければ、入道、畏りて、普天の下、羣土の濱、王土王臣にあらずといふことなしと承る。ましてや、この微賤の身、かく、まのあたり、寵渥の恩命をかうぶるをや。さりながら、入道の年若き時ならむには、弓矢とる身のならひなり、

あへて、死を白刃の際に決して、深く、恩を黄泉の下に感ずることもありなまし。今は、齡、すでに傾きぬ。たとひ、この戦に死ぬることなからむにも、餘命またいくばくぞや。されば、をしかるまじき身なる故に、私の名譽をむさぼりて、いかで王命にはそむきまゐらすべきと答へ奉りて、やがて、城を去りて、高野山に赴きぬ。(藩翰譜)

柴田勝家

湯淺常山

永祿十二年、佐佐木承禎、柴田勝家が守る所の、長光

寺の城を圍みて攻め、遂に、總構をうち破る。勝家、本丸にありて、ここを先途と防ぎ戦ふ。郷民、佐佐木が陣に行きて、この城は、水の手遠く、遙なる所より、水を取り候ふ。それ、取りきる程ならば、城は保つべからずと、告げ知らせければ、承禎、喜びて、水の手を取りきりたり。城中、これにくるしめども、弱れる色を顯さず。

承禎、これを見むために、講和にことよせて、平井甚介を使として、城中に入れたり。平井、勝家に對面し

て、手水を請ふ。瓶に、水の満ちたるを、小性兩人して、かき出だす。平井、手を洗ひければ、小性、残れる水を庭に棄てたり。平井、歸りて、かくといへば、事の違ひたる故に、怪みあへり。かくて、城中、すでに、水竭きければ、勝家、明日は、討ちて出でて、切死せむとて、諸士をあつめ、最後の酒宴をなす。残れる水を問へば、二斛ばかり入るべき瓶を、かき出だす。さらば、この間の渴をやめよとて、人人に、飲ませける後、勝家、薙刀の石突にて、瓶を碎きたり。夜明け方に、門を開きて、

うち出づ。佐佐木、思ひもよらざれば、大に、敗北しけるに、勝家、首、八百餘級を得て、岐阜に獻ず。勝家は、猶、長光寺にあり。信長、感狀を興へて、賞せらるること、大方ならず。これより、勝家を、瓶わり柴田と、世に稱しけり。(常山紀談)

松平信綱の幼時その一 作者不詳

信綱公、慶長元年十月三十日に、誕生し給ふ。大河内金兵衛久綱公の御嫡子にて、幼名を、龜千代君と申ししが、やがて又、長四郎君と、改め給ひぬ。もと、勇健

にましますを、殊に、在郷にて養育せられ給ひしかばよろづ、活潑に振舞はせ給ひけり、野に出でて、鳥など、追ひ廻らせ給ふこともありしが、垣などの竹の中を、事ともせず、駆けあるき給ふに、いつか、振袖の袂の、竹の先にかかりて、落ちけるも知らしめさず、御宿へ歸り給ふを、下部の者、野に出でて見るに、二間ばかりの竹の先に、御袖の掛れるを、拾ひて歸りぬることさへあり。かやうのこと、屢あれば、過もあるべしと、母君、いましめに、龜千代君をとらへて、

押し伏せ給ひ、ちひさくては、きくまじとて、大きな灸を、數數すゑさせ給ふ。御齡、僅に、五六歳に、ならせ給ひし程のことなれども、能く覺えぬ給ひて、御齡たけさせ給ひし後、このことを、母君にのたまひて、きつき御戒を遊ばされたりと、おどけさせ給ひけり。

松平正綱公は、信綱公の叔父君なれば、信綱公、御幼少の頃は、多く、かの御館に、ましましぬ。一日、正綱公獨坐の所へ、行かせ給ひ、某は、御代官の、外ざま者の

子にて、口惜しくこそ候へ。おそれながら、御苗字を下され、御養子になさせ給へど、のたまひけり。正綱公、うち笑ひ給ひ、いとけなき料簡にて、何とて、本名を抛ち、わが養子たることを望み候ふらむと、問はせ給ふに、本名にては、上の御近習、叶ひがたし。御養子にもならば、御坐近く、御奉公も叶ふべくやとて、かくは申すと、いとおとなしくのたまひけるを、正綱公、不便がらせたまひ、さらば、養子とせむ。但し、苗字は、親方へ達して後にこそ、許さめとあるに、長四

郎君、今日以後、松平を名のり申せば、この館にこそ宿らめとて、その夜より、正綱公の御館に、ごどまり給ふ。正綱公は、兩親のおもはくもいかがあらむと、のたまへば、兩親へは、最早、わが身より、申しつかはしぬ。今宵より、我は、松平長四郎とて、悦び勇み給へり。信綱公、八歳にならせ給ひし時の、御事になむ。この事、いつしか、台聽に達して、さやうに、不便に存ずるものならば、召し使ひ給はむとて、その翌年、御誕生の、竹千代君と、聞えさせ給ふ御方へ、御小性の

列に、入れ給ふ。台徳院殿、行末、竹千代君の、御重寶に
なるべきものと、御鑑定ありければ、先づ御つかひ
こませ給ひて、進らせられむとて、乃ち御つかひな
されたりとかや。凡そ、御小性の列坐に仕りまつる
に、御用にて召さるる時は、何事にても、すべて、坐次
の順に應ずる御作法なれば、各、その掟は守りなが
ら、もと、若輩のあつまりなるゆゑ、皆、我儘を振舞ひ、
御次に出でて、休みがちなるを、長四郎君は、常に、そ
の缺を補ひて、詰所を退くことなく、御用を、うけた

まはり給ふにより、奇特なるものと、御感あらせ給
ひけりとぞ。

松平信綱の幼時 その二

ある時、台徳院御秘藏の屏風、御次の間にありしが、
長四郎君、御自分より、年上の同輩と、戯れ給ひて、そ
の屏風を、破り給ひけり。出御の節、御覽ありて、何者
のわざと、御次の間にて、かやうのこと行ひたるは
と、仰せ給へば、戯れたる年上の同輩は、詞もなく、
控へたるに、長四郎君、十歳ばかりのことなれども、

私が、あかあかの事にてと、小聲になりて、御側なる衆まで、申し上げさせ給ふを、聽かせ給ひて、よくぞ正直に、言上したる者かなとて、却りて、御褒美あり。さりながら、重ねて、たしなみ申せと、上意ありきとかや。

同じく、十歳ばかりに、ましましける時のことなり、ある日、御臺所にて、晝飯を喫せらるるに、時の老中、酒井雅樂頭、土井大炊頭、青山伯耆守等、その他、歴歴の居られける所へ、上様召させらるるとき、こし召し

て、箸を投げ捨て、膳の上を跳ね越えて、御前へ馳せゆき給ふ。正綱公、その體を見給ひて、宿所に歸られて後、長四郎君に、今日、御臺所にての體たらくを見しに、さてさて、尾籠なる有様かな。御老中、歴歴の坐し給ふ中にて、前後を辨へざる振舞、言語に斷えたり。無禮至極ぞと、涙をながして、教訓し給ふ。長四郎君、謹みて、のたまひけるは、御意、さることに候ふ。外よりは、無禮とも見え申すべく候へども、今日に限らず、いつにても、召さるる時は、脇ひらも見られず、

側に、誰の居給ふも、思ひ出だされず、少しも早く、まかり出でたしと、上様の儀を、一心に、大切に存じ奉るほか、他念なく、急ぎ候ふよしを、のたまへば、正綱公、悦び給ひて、それ程に、君の御上を、大切に思ひ奉るや。その心にては、必定、御用にも立ち、立身もすべしと、感涙を流されけり。

十四歳ばかりに、ならせ給ひし頃の事なり。御殿の、屋根の瓦の間に、雀の巢をくひ、子を産みたるを、ほしく思し召し、晝の内に、瓦の幾枚めに、その巢あり

と、數へおき給ひて、夜に入りて、屋根に上り給ひ、子を捕り給ひ、嬉しく思し召して、急ぎ下り給はむと、お給ふに、過ちて、足をすべらせ給ひ、箱樋の中へ、落ち入り給へば、金物切れて、樋は、庭の上にぞ、落ちける。御仕合よくして、樋の中に落ち入らせ給へば、御怪我は、お給はざりき。物音、おびただしかりければ、御殿ごよめきわたり、只事にあらず、誰ぞ出でて見よと、詮議まぢまぢなるゆゑ、御椽の下へ、恐び給ひ、内の様子を、聞かせ給ふに、女中衆、おそれて、出づべ

しと申す者もなし。一人器量ものありて、挑灯を持ち出で、これを見て、御殿の樋おちたり。別事なしといひて、早々に内へ入りけるゆゑ、嬉しく思し召して、内の鳴音を、ひそかに聞かせ給ふに、何の沙汰もなければ、そと戸をあけて、入らせ給ひけり。その後、大御臺所、御意には、御殿の樋釣、金物にて、つけたれば、落つべきやうなきに、只事にあらずとて、高德の僧どもに、仰せ付けられ、御祈禱せさせ給ふ。長四郎君、思し召すやう、我身故に、上上様、お氣遣に思し召

さるるを、われ、如何やうの死罪に、仰せ付けらるとも、いかで隠しおかむやとて、女中衆を頼み、春日殿まで申し出で給ひけるに、御臺所の御耳に達し、さることなれば、何の氣にかくるにてもなきにと、安堵せさせ給ひぬ。さて、幼少なる身にては、一志ほ、申すまじきことなるに、君の御ためを、大切に存じ候ふ眞實、萬人にすぐれたり。竹千代君の御ため、重寶なる人になりなむとて、一志ほ、後のためを思し召しければ、懲らしめに、袋に入れよとの御意にて、袋

に入れられ、殊に封印をつけられ給へり。女中衆、いたはしの長四郎殿かな。喉は、かわき給はずや。飢は、覚え給はずや。いかに、苦しくやなどいひて、慰めきこゆるに、各、それほどに、いたはり思し召すかや。さらば、袋の縫目を解きて、御出しありて、用を叶へさせ、又、入れ給ひて、縫ひおかるべしと、のたまへば、さて、年寄も及ばぬことを、申し給ふものかなとて、やがて、解きて、食物などを進め、後、入れて、もとの如くに、綻を縫ひおかれしが、ほどなく、免され給ひけり

とぞ。(松平豆州言行錄)

京都の地震

作者 不詳

今年は、寛文二、みづのえ寅の年、五月朔日、巳の刻ばかりに、空かきくもり、塵灰の立ちおほひたるやうに見えて、雨氣の空にもあらず、夕立の氣色にもあらず、いかさま、雲を呼ぶ龍の、あがるといふものか、それか、あらぬか、雲か、けぶりかと、惟むところに、良の方より、何とは知らず、ごうごうと鳴り響きて、揺りいだす。上下、地震とは思ひも寄らざりけるが、大

家小家、めきめきとして、動き震ふこと、おびただしきに、すはや、世の滅して、只今、泥の海にならむぞやと、京中の諸人、上を下にうちさわぎ、大道として、逃げまどふ。生れてより、このかた、日の影さへ見ぬほどの、やごとなき女房達も、帶ときひろげ、さばき髪して、跣足のままに、耻を忘れて、驅け出で、をめき叫ぶこと、いふばかりなし。

家居は、はでやかに、作りみがかれしかたがた、堂舎、佛閣、社頭にいたるまで、或は、棟木くじけ、梁ぬけ、瓦

おち、垂木をれ、さしもの碎け、軒傾き、或は、志きぬ、鴨居はゆがみ、さしこめたる戸障子どもを開かむとするに、つまりてあかず。これに、心をとられて、氣を失ひ、又は、逃げむとするに、地傾き、足よろめきて、打ち倒れ、伏しまろぶ側には、家崩れて、落ちかかるさしもの、なげし、鴨居に、頭をうちわられ、倒るる小かべに、腰の骨をうち折られ、二階よりおるものは、おちかかる棟木に、髪の手をはさまれ、袂を挟みとめられ、みづから、かたな脇差にて、切りはなち、逃げ

おりて、はうはう、一命を拾ひ、又は、大木にうちひしがれ、ひらめになりて、死ぬるもあり。傷をかうむりて、呻き臥し、今をかぎりのものもあり。凡そ、京中の騒動、前代未聞の事どもなり。

この時にあたりて、洛中、はしばしには、家も倒れ、人も傷をかうむり、土藏の崩れたること、京都に二百餘庫なり。うち殺されける人、四十餘人とかや。そのほか、諸寺、諸社の石燈籠、築地、五輪石塔などの崩るもの、數を知らず。寺寺の釣鐘どもは、撞木うごき

ふらめきて、みな、一同に、早鐘をつきけるこそ、いにご肝つぶれて、おどろかれけれ。生れてより、このかた、かかるおびただしき、大なるは、覺えしこともなしなどいふ中に、又、揺り出だし、時をうつさず、間をもあらせず、揺りけるほどに、五月朔日、晝の中に、五十六度、その夜に入りて、四十七度に及べり。揺り初めのほどのやうこそはなけれ、かく、揺るからに、いかなる大ゆりにもなりて、うちひしがれなむとおそろし。いにし慶長の大地震にも、大地裂けて、水わ

きあがりなほ、その古は、火さへ燃えいでて、人のおほく死にたりといふ。この度の大地震も、後には、いかなることかあらむと、手を握り、足を空になし、起きてもあられず、寝てもあられず、揺り出だす度毎に、家家に、関の聲をつくり、いとけなき子供は、泣き叫ぶ。何とは知らず、地の底は、ごうごうと、鳴りはためきて、京中のさわぎだちたるごよみに、物音も聞えず。とかく、町屋の家どもは、残らずゆりくづすべし。命は、大事なりとて、貴賤上下の人人、或は、寺寺の

堂の前、墓原、或は、町の廣み、四辻のあひだに、下には、戸板を敷き、竹の柱を縄がらみにし、上には、漣紙、雨合羽をひき張るほどに、京の諸寺社にも、居あまり、北には、北野、内野、紫野、蓮臺野、船岡山のほとり、西のかたは、紙屋川をくだりに、西院山のうち、朱雀の土手のうち、南は、山崎街道、九條おもて、東のかたは、加茂川のほとり、ひがし河原をくだりに、鹽がま、七條川原にいたるまで、透間もなく、小屋がけして、集り来る老少男女、幾萬といふことを知らず。小屋がけ

のためにとて、下部どもの持ち運ぶ道具ども、西より東へ、北より南へ、逃げまどふ人に、揉みあひ、込みあひ、或は、乗り物にて行く人も、又、揺り出だして、間もなき地震に、をのこども肝を消し、足なえては、乗物を、ごうごうちおとし、或は、屏風、障子を擔ひかたげて行く者も、うち倒れては、破り損ふ。昔の事は知らず、この度の地震に、貴賤上下、あわてたる有様、たとへむ方なし。かくて、朔日の夕暮がたになりたれども、いささかもゆりやむことなく、去かも、雨さへ

降り出でつつ、雷さへ、おどろしくなるさわざにうちそへ、この行末の世の中よ、何となりはつべきことぞやと、親子兄弟、たがひに、手をとり、額をあはせ、いとけなきをば、抱きかかへて、うづくまり居るに、小屋の屋根、雨もり、下ぬれて、いとど物わびしきかぎりなり。

五月二日になりても、いよいよ、なるは、揺りに揺りて、大病をうけて、久しくわづらふもの、さては、産後の女房などは、氣をとりあげ、心を失ひて、空しくな

るもの、洛中に數を知らず。町屋の家家をあけて、小屋ごもりせし間を覗ひ、盜人、いり來て、物をとり逃げはしる、のがすまじとて、追ひかけ、打ち伏せ、踏み倒し、さうざうしさは、かぎりもなし。その日も暮れて、三日になれども、ゆり、未だ、やまず。かかるところに、西山のかたより、ひかり物、とび出でて、比叡の山の峯をさして行くこと、さしも早からず。その大きき、貝桶ほどにて、あかきこと、火のごとし。おづかにとびて、山にかくれたるに、諸人、このよしを見て、い

かさま、只事にあらず、世の中滅して、人のたねなくなりなむなど、いひののしる。大津三井寺わたりにても、皆、そを見たりとかや。又、京の寺町、三條のわたりより、南をさして、火の玉、とびけるが、その形は、瓢の如く、尻ほそく、色青く、あとより、火の粉のごとく、火のちりけるなど、これぞ天火といふものならむ。この上に、京中、大火事いでて、一面に焼けほろぶべしと、噂しけるほどに、身上よろしき人は、土藏を立てて、財寶を入れたれば、たとひ、家は焼けぬとも、財

寶道具は、事あるまじと、日ごろは、頼みおもひけるに、洛中の藏どもは、おほかた、崩れ倒れ、その外、戸前かたぶき、軒ゆがみ、壁われはなれ、土こぼれ落ちたれば、火事ありとても、入れ置くべきやうもなく、資財雜具を、人家はなれし、寺、寺社に運びあづくる有様、東西南北、せき合ひたり。このあづくる所縁なきものは、肩に荷ひ、背に負ひて、小屋がけの中に運び入れて、積みおきけるも夥し。みだりがはしき洛中の騒動、地震にとりまぜて、一かどならぬさわざ

にこそ。(艱難目異誌)

樺島浪風の記 その一

中 島 廣 足

九日、つとめて、薩摩の御船出でぬ。舟唄うたひて、いとにぎははし。今日は、曇りみ晴れみにて、わが舟は出でず。夕つかた、渚の家に行きて、湯あみし、酒飲み遊ぶ。船人も、みな、呼び出でて、飲ませなごす。いみじう酔ひて、船にかへりぬるに、風、やうやう、吹きまきりぬ。島かげに繋ぎたる船の、へづな、ともづなさへかためたれば、なでうことかあらむと思ひて寐ぬ。

船人も、心強げにいひて、みなねたり。亥の時ばかりより、雨降り、風烈しくなりて、頭の上に散りかかる。あづくの、ひややかなるに、目さめて見れば、苦も、かつがつ、吹き取られて、あらはなるに、船人、たちさわぎ、とかくあつつ、碇綱かためなどす。かかるをり、岸に近ければ、巖に觸れて、船そこなふなりとて、少し、沖の方に出だしぬ。やうやう、吹きまさるに、風追ふわぎとて、船こぞりて、ほうほうと、聲のかぎりおらぶ。今は、船よりおりてむと思へど、いと暗くて、岸の

程も見えわからぬば、暫し、ためらふほど、俄に、火の事ありと騒ぐを、苦のひまより見れば、この船より、三町ばかり上つ方に、つなぎたる大船のあたりより、火燃え出でぬと見えて、風につきて飛び来るほのほ、空にみちてわが船にも、ほとほと、落ちかかりぬべし。人人、さわぎ立ちて、よく見れば、燃ゆる火にはあらで、渚の方より飛び来る光物なりけり。なまりの大きなものありて、空高く、くるめき上るさま、おそろしといはむも、世のつねなり。之倫と共

に、手火取りて、船人の働を助けむとすれど、みな、吹きけたれて、ともしつけぬべきよしなし。今は、岸に漕ぎよせて、皆、飛びおりむとの心構す。空は、墨をすりたらむ様なる中に、濃き薄き雲見えて、龍などいふ神もかけるらむと覺ゆ。俄に、風の勢まさりて、雷の落ちかかる如く、大波の立ち重なり來るに、得堪へで、いかに、いかにと、船長を責むれば、今ぞ驚きかしこみて、ともづなも、とく、切れて待り、岸のほど、遠く吹き放ちぬれば、いと暗きに、いづこにかおりさ

せ給はむといふ。など、志か遠くなるまで、告げざりつるぞと、腹立ちいへどかひなし。大浪に漂ひて、高き山に登り、深き谷におちいる心地す。この風、はじめは、東風なりしを、巽になりてど、かく烈しくは吹きまきりたる。みさきの浦より、巽にあたれる島なれば、みさきの方へぞ吹き放ち行く。同じ様に泊れりし船、百ばかり、一つ浪風に吹き集められ、ゆり漂はさるるほどに、互に、うちあひて、屋形、ふなだな、かつがつ碎け散る。右の方より、三つの大船、舳を並べ

てつきあひたるに、まづ、之倫が鎧櫃碎けて、さながら、海に入りぬ。かこども、その舳にとりつき、命をかぎりに押し放たむとすれども、蹈みあむる船板は、雨そそぎて滑かなれば、すべりにすべりて、力出でず。二度三度も突き合ふほどに、わが船のせがひは、ことごとく碎けぬ。碇綱どもを、なほ、引きたる船のあれば、かく、一つには當り合ふなりとて、綱切りてよと叫べど、彼方の船には、人ありとも見えず。腰刀引きぬきて、一つ二つは、切り捨てぬれど、なほ、大

きなる船どもの打ちよせつき合ふほどに、今は、力つきて、彼方の船に飛び移り、逃るるもあり。後に聞けば、このかこどもは、みな、死にけり。左の方のみ、事なかりつるに、めりめりといひて、碎くるを見れば、舳の方裂けたる大船の、わが屋形の上に、浪とともに、おし上りくるなり。わが船、たちまち、かたぶきて、今、ひとゆりに、海の底に入りなむとすれば、あはやとて、われも人も、浪の中に飛び入りぬ。さるは、はじめ、鎧櫃の碎けぬるほどに、船長、いみじきおももち

して、おづおづいひけるは、いとかしこきことに侍り。かくいみじき風になりぬべしとは、夢にも、思ひより侍らざりき。多くの船ども、かく、碎けもて行きぬれば、今は、危きをりに侍り、御心かまへせさせ給へといふ。とくより、さは思ひをるぞとて、船ばたには出でたちぬれど、いと暗き夜に、破れたる船どもの、浪の間にうち合ひ漂ふめれば、ことなく、泳ぎ上るべくも覺えず。さりとて、船と共に、いたづらになりぬべきにもあらねば、今は、命をかぎりに泳ぎ見

てむ。かかるをりに、とかくの物を身にそふれば、中に、浪をわけ行くさまたげなりと、之倫と共に、いひ合せて、衣ぬぎ捨て、たふさぎの上に、帶を結び固め、短き刀一つさして、船板一ひら、脇ばさみもち、今や、飛び入りてむと思ふほどに、この大船には、おしかたぶけられたるなりけり。暗き夜なれば、光物、空に飛びわたりて、ほのかに、岸のほども見ゆるは、三十丈ばかりもあるべし。同じく、飛び入りたる人人、いづくに泳ぐらむとも知らず、筏の様なるものの

浪のまにまに、漂ひ來るを見つけたるは、いどうれしくて、どかく泳ぎつつ、浪をかくに、やがて、その物に、取り附かれぬ。ただちにはひ上りて見れば、竹をあみたる物なりけり。こは、このあたりにて、かけといひて、岸より海の上に、すのこの如く作り出だして、鰯を干す物なるが、浪にそこなはれて、漂ひ居たるなりと、後にぞ聞きつる。この物なかりせば、必ず、死ぬべきを、神の御幸はありけるになむ。なほ、岸遠ければ、いかならむと、暫し、息つきをり、同じくはひ

乗りたる人、四人、やうやう、岸の方にうちよするを見るも、ただ、この光物のみぞたのみなりける。今は、十丈にも足らずなりぬるに、岸よりかへる荒浪につれて、又も、海の中に、飛びいりぬ。命をかぎりに泳ぐほど、力つかれて危きに、忽ち、大浪うち來りて、海の底に沈みぬとおぼゆるに、大きな巖にうちつけぬ。やがて、その巖に固く取りつきたるほどに、浪は、引きも行きければ、急ぎはひ上りぬ。ただ、ゆめの様に、物もおほえず。之倫をはじめ、人人はいかな

らむと思ふに、降りそそぐ雨、ふきまき風、立ちきほふ汐煙に、息もつきあへず、たふれ惑ふ。こなたかなたより、泣きまどふ女の聲も聞ゆ。

樺島浪風の記 その二

わが船なる十人ばかり、やうやう、呼びかはし集りて、家あるかたへ行くに、かつがつ、風に吹き倒されて、おもてあぐべうもなし。からうじて、伏屋めくもの見つけて、人人、おし入りたるに、やがて、その屋もひしめき倒れむとすれば、又も、立ち出づるほど、倒

れ惑ひて、ちりぢりになりぬ。浦わの家ども、かつがつ倒れて、屋根瓦などの散り來るは、木の葉の如くに、頭も打ち碎かれぬべし。やうやう、火の光見えたる家に入りて見れば、知らぬ人三十人ばかり、おしこり居たり。衣ぬぎて絞居たるもあり、あるは、裸にて震ひわななくもあるなど、誰も同じやうにて、うとましといはむも、世の常なり。あるじは、離れむとする戸を押へ歩くに、火たき居たる女も、立ち走り、騒ぎ惑ふ。又、この家もうちゆるげば、いかで昨

日、湯あみせし家に行きて、之倫をも尋ねばやと思ひて、どかくたどり行くに、多く倒れたる家ども、柱うつばり、横はり臥して、足もふみ立てがたし。少しよろしき家見つけて入りぬるは、之倫が従者と己と二人なりけり。ここには、人も少なければ、はひ上りて、櫓の火さしそへつつあたる。あるじ、いたはりて、己が衣取り出でて、着せたり。袖もなくて怪しげなるも、いとうれし。二三人居たるは、異國人、同じく船やぶれたるなり。かかるさわざの中にも、あるじ

情ありて、今は、いかがはゑたまはむ、命だにあらばなど慰めつつ、濁れる酒、あたたためて、進めなどゑたるに、少し心おちゐて、

かけて祈る、神のちかひし、なかりせば、

海のみくづと、なるべかりけり。

とぞ思ひ續けける。曉ちかきにやと思ふほど、浪風の響、山ものこるまじう轟きたり。船は、いかになりぬらむ、さりととも、みながらは、碎け果てじ、なにくれの調度ども、一つだに身に添へず、いとあさましき

ことにもあるかなど、思ひ續けつつ、かくて、命の全
かりしうれしさに、かへて、萬の心うさを思ひさま
す。なほ、わが船の人人を尋ねまほしきにも、夜の長
きこと、千夜を一夜の心地す。やうやう、明け方にな
りぬれば、少し、風おづまりぬるに、之倫が從者は、主
人の身の上、心もとなしとて、尋ね行きぬ。板戸の隙
のあらみ行くを、少しあけて、沖の方を見れば、白浪
高く空にみちて、たちあきるに、汐煙は雲の如く、山
山に、棚引き行くさま、言はむにも、言の葉及ばず、繪

にも書きあへじとぞおぼゆる。浪の隙より見ゆる
小島には、百餘の人、上り居て、こなたに向ひて、助け
よといふさまあたり。又、その傍なるいはほに取り
つき居たる二人、をりをり、浪の上に現れて見ゆる
は、得も上らぬなるべし。船は、一つだにのこらず流
れうせて、高き岸さへ崩れたる、見るもすすろにて、
心肝も消え失せぬ。明けはてぬれば、とかくして、昨
日のやごりを尋ぬるに、家みな倒れて、いづことも
わかず。からうじて見出でたれば、之倫をはじめて、

二十人ばかりぞ、ここには居たる。いどうれしく、か
たみに、顔見かはして、こはいかにといひたるのみ
にて、言葉も出でず。今ぞ、人人も、岸にいでて見る。立
ち上る浪の色も、今朝は、うらめしう見ゆ。我船の人、
ずべて、二十九人なりけるが、こなたかなたより、や
うやう、出で来て、二十一人ぞありける。残れるは、之
倫が従者一人、かこ七人、ここかしこ、尋ぬれど見え
ず。この島人どもは、破れ残りたる船三つばかりし
て、かぢあまた立てて、かの中島なる人人を助けむ

とて、漕ぎ行くに、なほ、浪高ければ、舟進まず。ただ、同
じ所に漂へり。島なる人人、まづ、乗らむと争ひおる
るに、乗りあまりて、又、岩の上にかへり登るなど見
ゆ。からうじて助けのせ來れる、その中にも、わが船
の人はなし。さは、徒になりにつむと思ひはつるも、
いとあさまし。かこの中に、親子ありけるが、親は、早
く泳ぎ上りしに、子の上らぬをいかならむとて、又
も、船の方に泳ぎ行きつるを見し人ありけり。さな
がら出で來ぬは、親子共に死にけるなるべしとい

ふも、いとあはれなり。今日、この島にありて、かたみに、憂きことども語りくらす。裸なる人のみなれば、あるじの衣は、さらなり、むすめのをさへ、取りいでて、きせたる。赤き、袖口より、毛おひたる黒き手をさしいでて、とかくのことするさま、今ぞ目につきていとをかしく、かたみに、うち笑ひぬ。をりしも、かたへなるもののなかより、人一人いで來たるは、失せつるかこなりけり。よべ、ここまでたどり來て、ここちかきくらしければ、さながら、この物の中に、うち

ふして、今ぞ目醒めぬるといふ。いとけしからぬものこもありけるかなど、人人、つまはじきして、かつあざみ、かつ喜ぶ。誰誰も、よべは知らざりしを、今朝見れば、身うち、ここかしこ、きずつき痛みて、全き人もなし。上りし人人、すべて、一島にみちたれば、はつかなる島の中に、米盡きぬといふ。さるは、この風のけしきによりて、もたる人は、藏にこめて出ださぬにやなどいふも、いとにくく覺ゆ。せむすべなくて、素麵といふものを求めて食ふ。それもつきぬれば、

かこども、山畑なる芋ほりてもて來ぬ。酒をだにと求むるに、それもなしといふは、いと心ぼそし。今日は、むかひの浦に、船も通はねば、すべなくてくらしぬ。(欄國文集)

霧島山に登る記 其一 橘 南 谿

海陸二日路をへて、霧島山に入り、數十町のぼりて、霧島の宮居の前に着く。二神垂跡の地なれば、宮居、今にいたりて、殊に、美美しく、この近國にての大社なり。伏し拜みて、黄昏に及びぬれば、傍の山下坊と

いふ坊に宿す。この坊にて、先達の案内者を、宵の間にやとひ、翌朝、夜の間より登山す。雜樹、生ひまげり、日かげだに、洩れざるほどの山を、まかとしたる道筋も見えざるに、ただ、案内者のあとに従ひ、ひたのぼりに登る。その間、奇樹異草、名も知らず、目なれぬもの、いと多し。こは南方暖氣の山なれば、生ふる草の品類も、多きなるべし。概して、草木の種類は、北國の山などよりも、格別に多し。かくの如き所、五十町をのぼりつくせば、それより上は、樹木一本もなし。

ただ、芝の如き草のみ、生ひたり。そこに至れば、四方
豁達とうちはれ、薩隅日の三州、一望の中にいりて、
衆山は、波濤のごとく、大海は、青疊を敷きたるがご
とし。中に、櫻がま山、突として秀で、さながら、盆石を
おきたるが如く、その頂より、白き煙、四時に立ちの
ぼるは、恰も、香爐などのやうなり。景色無雙、筆につ
くしがたし。さて又、草ばかりの山をのぼること、更
に、五十町にして、それより上は、草もなく、ただ、栗ほ
ごの焼石ばかりなるが、山は、ますます、急峻なり。次

第に、登るにあたがひて、天地のけしき、やや變じ、不
時に、下の方より、雨そそぎ來り、或は、風、横さまに吹
き來りて、又、眺望のいとまなし。それより、二十町も
登りて、馬の脊越といふ所にいたる。こは、又の名を、
御鉢めぐりともいふ所なり。この所は、のぼらずし
て、平にゆくといへども、左右、皆、谷にて、劔の刃の上
をゆくがごとく、足のふむところ、纔に、馬のせなか
程なれば、馬の脊越といふなり。足をはこべば、栗の
如くなる焼石、左右の谷へなだれ落つ。その行くと

ころの、狭きを知るべし。さて、左の方は、萬仞の谷にて、底は雲にて、眼及ばず。右の谷は、ふかさ三四町、或は五六町にて、谷にみちて、猛火燃えあがる。この馬の脊越に、かかりて後は、只、何となく震動して、地軸、只今、くだけ折れて、この山、微塵に成るべきやうに覺ゆ。また、腥く、えもいはぬ氣、ふき來り、或は、墨の如くなる雲、うつまき來り、同行のものさへも、一向に、かくるることあり。或は、前後左右に、異形の雲煙あらはれ、鬼神の如く、佛神の如きこともあり。或は、足

もとより、虹たちのぼり、豎横になびきて、織りなせるがごとくなることもあり。また、天地、ともに、金色になることもあり。その外、奇怪ふしぎ、なかなか、いふもおろかなり。靜に、これを考ふるに、これ皆、谷一面の猛火によりて、又、陰氣もあつまり來り、火の上に雨そそぎ、雲霧覆ふがゆゑに、水火相激して、震動雷電し、又、水火薰蒸によりて、種種の形みゆるなり。又、硫黃、焰硝の氣あるうへ、それに、水をそそぎたるゆゑ、種種の匂もいづるなり。また、折折、一陣の烈風、

ふきくることあり。このときは、先達、教へて、急に、うつ臥に、倒れ伏さしむ。はらばひにならざれば、風のために、この身をとりれて、猛火のうちに、舞ひ落つるなり。折節は、風のために取らるるものあるゆゑに、この山にては、紛失する人多しといふなり。予も、殊に、この風を恐れて、少しの風にも、急に、うつぶしになり、地に取り付きて、風に放たれざるやうにせり。まばしにて、又、急に、風もやみ、空はるることもあるなり。須臾の變幻、定りあることなし。この所に、か

かりしより、さしも勇氣の若者も、大に恐れ、足戦きて、立つことあたはず。されど、先達と、前後より介抱して、いろいろと耻ぢしめ、まばしが程は、引き行きしかど、後には、目見え、顔色變ぜしかば、いかにともまがたく、殆ど、迷惑に及びしに、先達、いふやう、けふは、山も格別にあらし、殊に、かかる人引具し行かむこと、いかにも叶ふべからず、登山も、これまでなり、これより、下山すべしといへば、力及ばず、本意なくも、それより下る。

霧島山に登る記 その二

終に、十町ばかりを下れば、天氣晴朗にして、風おもむろに、四方の眺望はじめのごとし。しばらく休息して、焼飯など食し、心を鎮めしかば、若者も、けしき常の如くにして、さきには、いかにして、かばかりは、おそろしかりつるにかと、三人うち笑ふ程なり。われ、つくづく思ふに、かかる事のありて、妨げにもなるべからむかとて、凡庸の人を、同道せざりしなり。然るに、今、若者がために、予までも、絶頂を、きはめず

して、これより下山せむこと、生涯の遺憾なるべし。何とぞして、一人なりとも、登りたきものをと、おもひめぐらして、先達に、これより絶頂までは、道の程、いかほどあるかと問ふに、馬の脊越の長さ八町、それを過ぎて、急に登るところ、十町ばかりもやあらむといふ。さらば、纔の道なり、紛れ道やあると問ふに、兩方、谷なれば、紛るべき道なしと答ふ。さらば、あまり、残念なれば、予は、獨歩して、絶頂に登るべし。この所に、若者を守り居て、わが下り來るを、待ちくれ

よとて、どどむるをも聞かで、再び登るに、前の馬の脊越に至れば、天地たちまち變じて、また、はじめのごとし。先達がをしへに任せ、折折は、うつぶしになりて、風をさけ、千辛萬苦して、馬の脊越、八町が間、走りぬけたるに、先達がいひし如く、それよりは、眞直に登る所あり。この所にいたれば、天地、また、常の如くにして、奇怪なし。ただ、息をかぎりに登る程に、遂に、絶頂にいたれり。絶頂は、尖りて、纔の地面に、天の逆鋒あり。そを見つけたる時のうれしさ、何にかた

とへむ。逆鋒のありさま、全躰は、唐金の如くに見ゆれども、風雨にさらせるものなれば、青く錆びて、まかとは知れがたし。長さ、一丈餘ばかり、ふとき大なる竹程にて、さかさまに、地中に立ち、その石突の端の所に、南面に、鬼面のごときもの見ゆ。これ風雨にさらされたれば、鼻目、まかとは見がたし。土中に入りたる先の方は、何程深く入りたるか知るべからず。只、絶頂に、この鋒一本のみにて、外に、堂宇等のごときもの、一つもなし。まばらく、この絶頂に徘徊す

るに、天氣晴朗にして、四方、目の及ぶかぎり、見え渡り、その心地よきこと、今に忘れ難し。されども、かかる所は、久しく留るべきにあらざれば、いそぎ下りたるに、馬の脊越にいたれば、猶、前のごとく、天地晦冥にして、怪異はなはだし。悉く、筆に盡すべきにあらず。殊に、山上の有様は、人間に洩さざる山法なり。恙なく馬の脊越をこえて、ひた下りに下るに、遙の下に、先達、若者、かすかに見えて、大さ豆のごとし。嬉しくて、いそぐほどに、下るとはなしに、すべり落ち

て、須臾の間に、二人の前に着きぬ。恙なかりしことをのみ、ともに悦び、その夜、くれ過ぐる頃、宮居の傍の坊にかへりぬ。(西遊記)

中等國文讀本卷四 終

明治三十二年一月廿五日訂正六版印刷
 明治三十二年一月三十日訂正六版發行
 明治三十三年十一月十五日廿五版發行

定價表	
三、四、各貳拾錢	五、六、各貳拾貳錢
七、八、各貳拾貳錢	九、十、各貳拾貳錢

著者

落合直文
 東京市本郷區駒込淺嘉町七十八番地

發行者

三樹一平
 東京市神田區三河町二丁目十六番地

發行者

鈴木友三郎
 東京市神田區錦町一丁目十番地

印刷者

新井豐造
 東京市神田區錦町一丁目十番地

印刷所

明治印刷所

發行所

東京市神田區錦町一丁目

明治書院

關西專賣

大阪市東區備後町四丁目

吉岡平助

明治三十二年三月九日
 中學用文部省檢定濟

